

日本の擬音語（ぎおんご）と擬態語（ぎたいご）と

アメリカのオノマトペの対照研究

ジョン ワズデン

はじめに

日本語の擬音語・擬態語と英語のオノマトペとはいったい何だろうか？又これらは共通点や相違点があるのだろうか？

一般に言葉の意味と音の間には直接関連がない。例えば「橋」と「はし」という音の間に直接の関連はない。しかし擬音語・擬態語とオノマトペの言葉の意味とその言葉の音の間にはある程度関連している。要するに音とその意味には合理的な結びつきがある。

『外国人のための日本語例文・問題シリーズ・擬音語・擬態語』という本によると擬音語・擬態語は次のように説明されている。

- 1) 擬音語・・・外界の音を写した言葉
 - A) 擬音語・・・無生物の音を表わすもの
 - B) 擬声語・・・生物の音を表わすもの
- 2) 擬態語・・・音を立てないものを、音によって象徴的に表わす言葉
 - A) 擬態語・・・無生物の状態を表わすもの
 - B) 擬容語・・・生物の状態（動作容態）を表わすもの
 - C) 擬情語・・・人間の心の状態のようなもの。

簡単に言い換えれば、擬音語・擬態語とは外界の似せた音で、または感情や状態や動作などを象徴的に言語に写したものである。

私はこの研究課題の中で三つのポイントを取り上げてみたいと思う。まず一番目は音とその意味である。二番目は日本語の擬音語・擬態語と英語のオノマトペとの間にどのぐらいの共通点があるか。又相違点はどのぐらいあるかということである。三番目は生物の鳴き声を比較対照してみることである。

音とその意味

言語を取得する方法の一つの説として幼児期の時代はどんな音でも自由に出せる可能性を持っている。幼児はある音を使って両親へ伝える。幼児が与えた音に両親が反応を示す音に幼児達はだんだん自分の音を作りあげていく。それでいくつもの音を取得して又いくつもの音は失くしてしまう。言語によって使っている音が少しずつ違う。その子供が成長して育っていった中の言語に縛られる。その一度失われた音は使いにくくなる。音と同じように育っていった中の言語の擬音語・擬態語あるいはオノマトベにも縛られる。擬音語・擬態語とオノマトベの言葉の中の音には一つずつ意味がある。それでは擬音語・擬態語とオノマトベの類似点と相違点を調べてみる。

最初は母音から紹介する。日本語の擬音語・擬態語とオノマトベで一般の母音は、『日英語比較講座第4巻発想と表現』という本から引用すると、「低母音または長母音（またはそのどちらも）は、大きいこと、低いこと、距離が遠いことなどと結びつけられると言われる。また一方、高母音または短母音（またはそのどちらも）は、小ささ、高さ、近距離と結びつけられている」。また同じ本から次の例が上げられている。その比較を下記に表示した。

日本語		英語	
低母音・長母音	高母音・短母音	低母音・長母音	高母音・短母音
OOKI TOOI KOI	TIISAI TIKAI USUI	FAR STRONG HARD	NEAR WEAK EASY

上の二つの例では左側は低母音と長母音で右側は高母音と短母音である。すなわ、低母音と長母音は大きさや遠さを象徴して、高母音と短母音は小ささや近さを象徴する。

次に子音を紹介すると、子音の中には濁音と清音があり、日本語の濁音、g, z, b, d, が大きいもの、重いもの、鈍いもの、汚いものを表わす。濁音に対して清音は小さいもの、軽いもの、鋭いもの、美しいものを表わす。

例を上げると「サラサラとザラザラ」と「カラカラとガラガラ」などにその違いが見える。サラサラは軽くて美しいイメージがあり、ザラザラは汚いまた重いというイメージが

ある。またカラカラは軽い空き缶の音でガラガラは重いフライパンの音である。

拗音は一般に直音に対して俗語的で品が欠ける。シャラシャラはサラサラに比べて、ジャラジャラはザラザラに比べてその趣がある。

最後に日本語の中で一般の子音ではKとTは堅いことを表わし、Sは摩擦感のあることを表わす。Rは粘って滑らかなこと、H、Pは抵抗感のないこと、Mは柔らかいことを表わす。Rは流動を表わすが、同時に他の形態素と組み合わせられて、種々の状態を表わす。

英語のオノマトベの音は日本語の擬音語・擬態語の音ほど意味に縛られてない。しかし、意味を持つ文字の組み合わせがあり、例えばSNという組み合わせは鼻を象徴する。

SNORE, SNOB, SNEEZE, SNIFF, SNOOPは全部鼻で出来ている音の行動を表わす。GLは光と関連している。GLITTER, GLEAM, GLIMMER, GLOWは全部光のあり方と関連している。ASHは急ぎや速度と関連している。DASH, CRASH, FLASH, SPLASHは全部スピードと関連している。

上記の文字の組み合わせが象徴する意味を持っていても必ずしもその意味だけに縛られていない。英語の場合には多様性があるということである。類似点として日本の擬音語・擬態語と英語のオノマトベの音との意味の結びつき方が一般に似ている。しかし、相違点として一番大きな違いは英語より日本語の方が音と意味の関連が強いことである。又英語には例外が多いことも相違点として挙げられる。

擬音語・擬態語とオノマトベの使い方

普通の日本語会話の中に擬音語・擬態語が出ない場合は非常に珍しい。逆に言えば、普通の英語会話の中にはオノマトベが出ることは珍しいと言える。英語のオノマトベの場合は日常会話の中にはほとんど使用されることもなく、従ってオノマトベは学校の授業で学ぶだけで、特に文学の中に使用される特別の言葉のカテゴリーとなっている。しかし、日本語の擬音語・擬態語の場合は日常生活の言葉の中に非常に解け込んでいる。又当然のことながらその語彙の数も多く例えば日本語の擬音語・擬態語の数は約2500、それに比べて英語のオノマトベの場合は約1500と記されている。日本語の方では擬音語・擬態語に関する辞典も出版されているが、残念ながら、今のところ英語のオノマトベについては辞典は出版されていないようである。

また動詞の使い方も違う。日本語では動詞に擬音語・擬態語を付けて動詞の意味を変える。英語には各々意味が違う動詞がある。次のような比較ができる。

(4)

日本語	英語
チカチカする	・ FLASH
ベチャンコになる	・ BECOME MASHED
パンと開く	・ SNAP OPEN
キャーキャー言う	・ SHRIEK

もう一つの例をあげると、日本語の場合同じ動詞でただ擬音語・擬態語を変えるだけで意味が変わる。

日本語	英語
笑う	・ LAUGH
クスクス笑う	・ GIGGLE, SNICKER
ニヤニヤ笑う	・ GRIN, SMIRK
ニタニタ笑う	・ SIMPE
クツクツ笑う	・ CHUCKLE

英語の笑い方の言葉の中にオノマトベに近い言葉もあるが、今のところ学者はその言葉がオノマトベであるかどうかハッキリしていない。

日本語の擬音語・擬態語の一つの特色は、擬音語・擬態語の数が多いだけではなく公式もちゃんと決まっている。公式には五つの公式がある。

1. 一文字+「ー」、「リ」、「ッカン」。
例：カー、グッ、チョン、ピリッ
2. 最初の公式を二回繰り返した形。
例：ウハーッ、ササッ、カタン
3. 一番と二番を結び合わせた形。
例：セセラ、ピーチク、チョックラ

4. 二番を二回繰り返した形。

例：オイオイ、ウロチョロ

5. 三番と二番を二回繰り返して結び合わせた形。

例：ウツラウツラ、シドロモドロ、エッチラオッチラ

一般の擬音語・擬態語を元にした音があって、その音から異なった綴りが出来る。

英語は日本語に見られるほど規則的ではない。

日本語の擬音語・擬態語は会話によく出るだけではなく書物の中にもよく使われている。あるアンケートによると、現代の日本語の小説にはなんと1760の擬音語・擬態語が使われている。それに比べて、英語の小説にはオノマトベはあまり使われていない。

英語のオノマトベがよく出る所は漫画である。特に有名なのはバットマンである。漫画の中で特に喧嘩の場面ではオノマトベがよく使われる。日本の漫画にも擬音語・擬態語がよく出ている。後は日本の新聞や雑誌の見出しにも擬音語・擬態語がよく出る。その理由、は擬音語・擬態語には短い言葉でたくさんの意味が含まれているからである。

動物の鳴き声

私にとって一番興味深いのは擬音語である。特に動物の鳴き声は面白い。私が最初に日本に来た時、日本の友人と動物の鳴き声について話し合ったところ、同じ動物でも国によって表現する言葉が違うということが話題になった。友人は犬の鳴き声は「ワンワン」というと教えてくれた時、私は今迄犬の鳴き声は「バクバク」と誰もが言うと思っていたので非常に驚いた。

又鳴き声が違うだけでなく、日本語と英語の中にある擬音語も少し違っている。英語には家畜の鳴き声が詳しく表現されているが、日本語では虫の鳴き声が詳しく表現されている。具体的な例を上げて見る。

カラス・・・・・・・・・・（日本語）カーカー
（英語）コー

アヒル・・・・・・・・・・ ガーガー
クウアク

(6)

鶏・・・・・・・・・・・・・・・・コケコッコー
カークドウドルトウ

ろ馬・・・・・・・・・・・・・・・・無い
ヒーハー

豚・・・・・・・・・・・・・・・・ブーブー
オイंक

羊・・・・・・・・・・・・・・・・メエ
バー

ハチ・・・・・・・・・・・・・・・・ブンブン
バズ

小鳥・・・・・・・・・・・・・・・・チイチイ
チャーブ

猿・・・・・・・・・・・・・・・・キャツキャツ
イイキイイキ

蛙・・・・・・・・・・・・・・・・ゲーロゲーロ
クロウク

七面長・・・・・・・・・・・・・・・・ゴロゴロ
ゴブル

牛・・・・・・・・・・・・・・・・モウ
ムー

松虫・・・・・・・・・・・・・・・・チンチロリン
無い

ずず虫・・・・・・・・・・・・・・・・リンリン
チャーブ

せみ・・・・・・・・・・・・・・・・ジイジイ
チャープ

以上のように鳴き声の表現にもいろいろと異なっており、意味深い。

結論

今回の研究で解かったことは、英語のオノマトペと日本語の擬音語・擬態語には色々な共通点や相違点があるということである。文字の音と意味にたいして双方とも言語との関連があるが、日本語の方が強い。また、文字の特定の意味が言語によって少しずつ違ってくる。

日本語の擬音語・擬態語は英語のオノマトペより広く使われていて、また使い方もちゃんと決まっている。

英語のオノマトペの方は牧畜の動物の鳴き声が詳しく揃えてあって、日本語の方は昆虫の鳴き声が詳しく揃えてある。また国によって動物の鳴き声と同じ動物でも少しずつ違ってくる。

この研究を進める前に思っていたよりも擬音語・擬態語とオノマトペは複雑で面白いテーマであった。初めての研究だったが、この研究によって日本語を前より理解できた。日本語の擬音語・擬態語は、錯雑である。そして、日本の文化を象徴した言葉だと感じる。

(8)

参考文献

- 1 笈寿雄／田守育啓 (1993) 『オノマトピア・擬音語・擬態語の楽園』、日本
- 2 櫻順 (1986) 『オノマトピア擬音語大国につぼん考』、日本
- 3 尚学図書 (1991) 『擬音語・擬態語の読本』、日本
- 4 日向茂男／日比谷潤子 (1989) 『擬音語・擬態語、外国人のための日本語例文・問題シリーズ14』、日本
- 5 大坪併治 (1989) 『擬声語の研究』、日本
- 6 T. Kumihiro (1982) 『日米ご比較講座、第4巻発想と表現』日本